

(38)

印度學佛教學研究第 60 卷第 1 号 平成 23 年 12 月

漢語仏典における偈の通押とその要因

齊 藤 隆 信

はじめに

漢語仏典に説かれている偈は、中華の韻文作品のように完璧に押韻するものから、俗文学作品のように不完全ながらも通押¹⁾するものまである。そして、そのような現象にはいくつかの要因があると考えられる。ここでは、偈の押韻または通押の状況から (1) 押韻する偈、(2) 通押する偈、(3) 通押と推察される偈、(4) 失韻の偈、(5) 無韻の偈の 5 種に分類し、このうち (2) と (3) のみを問題とし、それぞれの特徴と通押の要因を検証する。これによって、漢訳者や撰述者による韻律への配慮の痕跡が明らかになるはずである。

1. 偈の通押

中華の詩文は、それが確実に韻文であることを前提に、異なる韻部の分合や通押を明らかにし、またその合韻譜を作成することが可能となる²⁾。ところが、漢語仏典の偈は、視覚的（音数律）には中華の詩文の体裁を採ってはいるものの、大多数は韻律が配慮されていない。したがって、それらの偈に、はたして韻律配慮が施されていたのか否かを見極める作業は、決して容易なことではない。

(2) 通押する偈

通押は中華の詩文でも見ることができる。漢訳仏典の偈にあっても少なくない。括弧には『広韻』の韻目と当該典籍の漢訳時代の韻部を併記した。

◎劉宋求那跋陀羅『摩訶迦葉度貧母經』(14/762c)

- | | | | |
|-------|-------------|------|-------------|
| ①大千国土 | 仏為特尊 (平魂・魂) | 次有迦葉 | 能閉罪門 (平魂・魂) |
| ②昔在閻浮 | 糞窟之前 (平先・先) | 為其貧母 | 開說真言 (平元・魂) |
| ③時母歡喜 | 貢上米潘 (平元・魂) | 施如芥子 | 獲報如山 (平山・先) |
| ④自致天女 | 封受自然 (平仙・先) | 是故来下 | 歸命福田 (平先・先) |

先部と魂部の韻字が押韻単位となっており、中華の詩文中の用例としては、晋代

ではわずかに3例にとどまるが、劉宋と北魏になるとあわせて30例を検出できる³⁾。したがって両部の通押は、5-6世紀には普遍的であったといえる。

◎後秦鳩摩羅什『大智度論』9 (25/94ab)

唯仏一人独第一	三界父母一切智 (去眞・支)
於一切等無与等	稽首世尊希有比 (去眞・支)
凡人行惠為己利	求報以財而給施 (去眞・支)
仏大慈仁無此事	怨親憎愛以等利 (去至・脂)

『大智度論』には、完璧な押韻から無韻や失韻の偈までである⁴⁾。この支部と脂部の通押例は詩文中にも少なくないので (三国25例, 両晋34例, 劉宋北魏14例), 当時の通押の許容範囲だったのである。

◎元魏吉迦夜『称揚諸仏功德經』下 (14/103a)

①徳如月満其如来	諸天最上為尊雄 (-jaŋ 平東・東)
此諸大尊徳中王	能為衆生除諸殃 (-juŋ 平陽・陽)
②持諸仏名功德成	能淨諸利為肅清 (平清・庚)
其難得値此尊經	少有衆生聞其名 (平清・庚)
③若有信行而供養	得大智慧勇力強 (平陽・陽)
解了諸法無有量	当成一切正覺王 (平陽・陽)
④正覺之法甚深微	不当於中起狐疑 (平之・之)
当善信奉諸導師	歡喜敬礼慎莫疑 (平之・之)

詩文中の東部と陽部の通押は、劉宋の用例としてわずかに5例だけである。しかし、②以下がすべて押韻していることを鑑みて、①偈にも韻律配慮の意図があったものと考えられる。

(3) 通押と推察される偈

これは同時代の詩文中に照らしても、通押例がまったく存在しないか、ほとんど存在しないような押韻単位であるが、その前後はみな押韻しているか、または通押している事実から、当該箇所もかなり緩いとはいえ、漢訳者によって意図的に配慮が施されたと推察しうる偈のことをいう。

◎西秦聖堅『演道俗業經』(17/836a)

①悉解其身空	四大而合成 (平清・庚)
散滅無処所	従心而得生 (平庚・庚)
五陰本無根	所著以為名 (-jeŋ 平清・庚)
十二縁無端	了此至大安 (-an 平寒・寒)
(以下略す)	

(40)

漢語仏典における偈の通押とその要因 (齊 藤)

庚部「名」と寒部「安」の通押については、それぞれ軟口蓋音と齒茎音である。詩文中に通押例はないが、ともに鼻子音で収束させようという意識があったのであろう。鼻子音尾 [-n, -ng, -m] の通押については後述する。

◎呉支謙『維摩詰經』(14/519c)

- | | |
|----------|----------------------|
| ①清浄金華眼明好 | 浄教滅意度無極 (-jək 入職・職) |
| 浄除欲疑称無量 | 願礼沙門寂然跡 (-jiak 入昔・藥) |
| ②既見大聖三界将 | 現我仏国特清明 (平庚・庚) |
| 説最法言決衆疑 | 虚空神天得聞聴 (平青・庚) |
| ③経道講授諸法王 | 以法布施解説人 (平真・真) |
| 法鼓導善現上義 | 稽首法王此極尊 (平魂・真) |
| (以下略す) | |

三国および劉宋における詩文の用例中に職部と藥部の通押は存在しない(晋に1例あり)。したがって、「極」と「跡」は押韻ではないが、本經のこの一連の偈は①-⑩まであり、②以降はすべて押韻していることから、この①も訳者支謙によって自覺的に韻律配慮がなされていたものとみなしたい。

2. 通押(緩い押韻)とその要因

以上のように、漢訳仏典の有韻偈頌は、すべて完璧に押韻しているわけではなく、隣接する韻部ともひろく押すような通押する偈や、通押と推察される偈が多い。その要因として想定されることは以下の4点である。

A. 訳者の漢語能力の限界

漢訳者には豊富な語彙力と的確な語音の識別能力が求められるが、必ずしもその条件が整ってはいなかった。そのことは『高僧伝』や『続高僧伝』の訳経篇に立伝されている訳者の伝や経序から知ることができる。インド西域から来華した訳者は、少なくとも3年から5年を漢語の修得に費やし、その後に漢訳を開始することが多い。この漢語修学の具体的な過程について、残念ながら詳細に伝える資料はないが、常識的に考えるならば、教育制度もない当時のこと、生活用語(日常会話)の修得程度であったと考えられる。漢訳仏典には口語成分が少なからず存在し⁵⁾、さらに用いられている字種が少ないのはその証でもある⁶⁾。したがって、訳者が身につけた漢字音とは耳で聞き取った実際の音であり、韻書に定められているような厳密な音韻体系に縛られた字音ではなかったであろう。すなわち耳で感知されるだけに、いくぶん曖昧さを伴った字音をもって偈の押韻単位となる文字を配置していたということである。以下はその一例。

康僧会訳『旧雜譬喻經』上 (4/510c) の漢字音

手足及与頭	五事雖絆羈 (平支・支)
但当前就死	跳踉復何為 (平支・支)
手足及与頭	五事雖被繫 (去霽・脂)
執心如金剛	終不為汝擘 (入麦・錫)

押韻すべき「繫 -i」と「擘 -k」が失韻となっていることについて、訳者としては「擘 -k」が陰声韻の「避 -i」や「臂 -i」などと音符の「辟」が共通することから、本来入声韻でありながら、これを陰声韻と誤認して、「擘 -k > -i」と「繫 -i」とが通押すると判断したものと推定できる。訳者らの限られた語彙数と字音の識別力が、文壇の詩文には存在しないような通押を生みだしたのであろう。

B. 転写過程における誤写

写本時代において、すでに誤写され、それが印刷大蔵經にも継承されたことも想定しなければならない。たとえば、支謙訳『太子瑞應本起經』(3/480c) には、①-⑩偈が説かれており、①偈だけが押韻していない。

①聽我歌十力 棄蓋寂禪定 (去徑・庚) → 定禪 (平仙・先) ?
 光徹照七天 德香踰栴檀 (平寒・寒)
 ②上帝神妙來 歎仰欲見尊 (平魂・真)
 梵釈齋敬意 稽首欲受聞 (平文・真)
 (以下略する)

この偈は、『普曜經』、『長寿王經』、敦煌本『太子瑞應本起經』で「…定禪」に作る。韻字が「禪」ならば第四句の「檀」とこの時代で押韻する。おそらくは転写間に「定禪」が常用の「禪定」に誤倒されてしまったのだろう。

また、現存する諸本にまったく異読（ヴァリエント）がない場合でも、大胆に予想することは可能である。西晋竺法護訳『生經』3 (3/87bc) の例を示す。

②能以權方便 令人得其所 (上語・魚)
 衆庶睹歡喜 悉共等称譽 (平魚・魚)
 ③工巧有技術 多所能成就 (去宥・侯) → 就成 (平清・庚) ?
 機関作木人 正能似人形 (平青・庚)
 ④挙動而屈伸 觀者莫不欣 (平欣・真)
 皆共歸遺之 所技可依因 (平真・真)

①-⑩偈のうち③偈だけが唯一の失韻である。前後の9偈はみな押韻しているので、ここだけが例外的な失韻とは考えられない。そこで竺法護が漢訳した当初「…

(42)

漢語仏典における偈の通押とその要因（齊 藤）

成就」は「…就成」であって、第4句の「…人形」と押韻していたと推定できる。先に同じく、押韻させるために、常用語彙の語序を倒置したのだろう⁷⁾。今後も良質な写本を蒐集することで、偈の合韻率が高まると見込まれるが、善本蒐集には物理的な限界もあって、校勘作業は遅々として進まないのが現状である。

C. 訳者の漢語習得地域の相違

漢字音の地域差（方音）は、陸法言の『切韻』（601年成書）序文から知ることができる⁸⁾。また『続高僧伝』30にも以下のようにある（55/706b）。

大地が鄭と魏を分かつように音声においても〔地域によって〕様々である。…（中略）
…よって中国一国の音声は同じでないことがわかるのである。

さらに『宋高僧伝』6（50/743b）の知玄（810-882）の伝にも、彼が長安の都に出てからも、郷里の眉州洪雅（四川省射洪）の方音が抜けずに恨めしく思っていたという逸話を伝えている。遠くインドや西域から中華にたどりついた者が、長安や建康といった一定の都市にとどまって漢訳するとは限らない。安世高・支謙・竺法護・帛尸梨蜜多羅・仏駄跋陀羅などは長安から江南へと移動してきているのがその例である。問題は彼らがいったいどこで漢語を修学したかということである。もし特定の地域で漢語を修学したならば、その地域に広く通用している漢字音が当該訳経の偈に反映されるものと予想されるからである。助訳者を含めて検証すべきではあるが、これを検証することは容易ではない⁹⁾。

D. 語義内容伝達の重視

インドの gāthā を、漢訳に際してもその韻文を活かすことは理想である。しかし、実際には漢訳された偈の大多数に韻律の配慮など認められない。この事実は、訳文を華美に飾り立てるよりも、意味を適確に翻訳することが優先されたということである。『法句経』の序（55/50a）の維祇難の立場がそれである。

仏言は其の義に依りて用て飾らず。其の法を取りて以て嚴らず。其れ経を伝う者はまさに曉め易くして、厥の義を失うこと勿らしめよ。是れ則ち善と為す。

また、鳩摩羅什伝には以下のようにある¹⁰⁾。

什は毎に叡の為に西方の辞体を論じ同異を商略して云く、「天竺の国俗には甚だ文藻を重んず。其の宮商体韻には絃に入るを以て善と為す。凡そ国王に覲へるに必ず徳を讃ずるあり、仏に見へるの儀に歌を以て歎ふるを尊しと為す。経中の偈頌もみな其の式なり。但だ梵を改め秦と為すに其の藻蔚を失う。大意を得と雖も文体を殊隔つは、飯を嚼みて人に与うるに徒らに味を失うのみならず、乃ち穢を嘔かしむるに似たることあり」と。

羅什は、インド仏典における韻文を中華の韻文として再構成することは不可能で

あると認めていた。また『維摩詰所説經』は、支謙訳本を参照していながら¹¹⁾、その有韻偈頌を自らの訳本に転用していない。これは、外面的な形態を取り繕うよりも、内面的でより重要な原意を忠実に漢訳しようという判断であったものと推察される。したがって、漢訳された偈の押韻についても、完全なものに仕立てることはかなわなかったのであろう¹²⁾。

3. 陽声韻尾 (-n, -ng, -m) の通押

脚韻に陽声鼻子音 (-n, -ng, -m) を配置することで、一定のリズムを確保しようとしていた例がある。それは、実際に読唱するための配慮であったと考えられる。ここに漢訳經典、撰述經典、浄土教礼讃偈から1例ずつ示す。

◎魏白延訳『須頼經』の偈 (12/56b)

①阿難聽我說	須頼初發義 (支 -i)	護人無仇善	徳広常大施 (支 -i)
②從始起意來	其數難縷陳 (真 -n)	供養仏無厭	奉法守不忘 (陽 -ng)
③學六度無極	進道樂久長 (陽 -ng)	梵行未曾漏	守法慧不傾 (庚 -ng)
④所行志念具	覺對立道地 (脂 -i)	已度衆邪網	性善覺内事 (脂 -i)
⑤已捨世八事	利衰毀譽意 (之 -i)	一切等心視	如空無罣礙 (哈 -i)
⑥愛法行無倦	守忍慈為常 (陽 -ng)	愛人如愛己	棄身安群生 (庚 -ng)
⑦愛習悉教彼	念熟説義實 (質 -t)	覺意不離法	解空導二脱 (曷 -t)
⑧三忍具無念	學法知可行 (庚 -ng)	所至必開導	一切蒙其恩 (真 -n)
⑨所在國邑興	輒往到其方 (陽 -ng)	宣化如仏意	遍教諸天人 (真 -n)
⑩我般泥曰後	末時須頼終 (東 -ng)	生東可樂國	阿闍所山方 (陽 -ng)

(以下略す)

この偈は①-⑩まであり、34字の韻字のうち、陽声韻 (-n, -ng) が25字、陰声韻 (-i) が7字、入声韻 (-t) が2字である。陰声はすべて [-i] 収束音、入声は [-t] 収束音であり、また25字の陽声韻では、齒茎鼻音 [-n] と軟口蓋鼻音 [-ng] が混用されているものの、やはりそれぞれまとまって配置されている。したがって、訳者が押韻単位に、陽声韻の漢字を配置しようとしていたのは明らかである。なお、これと同じ例は後漢失訳『後出阿彌陀仏偈』にも見られる¹³⁾。

◎北魏曇弁作『妙好宝車經』の偈 (85/1335a)

如母得子病	殺生求魔神 (真 -n)	不得一言福	罪如須弥山 (先 -n)
念人衰老時	百病同時生 (庚 -ng)	水消如火滅	刀風解其形 (庚 -ng)
骨離筋脈絕	大命要當傾 (庚 -ng)	吾欲畏是故	求道願福生 (庚 -ng)
(中略)			
欲求過度我	燒香請道人 (真 -n)	不經八難苦	皆由宝車經 (庚 -ng)

(44) 漢語仏典における偈の通押とその要因 (齊 藤)

身直影亦直	身曲影直難 (寒 -n)	心直事事直	心曲直事難 (寒 -n)
魚鱉隱在海	掃地求活難 (寒 -n)	猿猴急依樹	無樹脫亦難 (寒 -n)
人急依於仏	無戒求仏難 (寒 -n)	放身自縱恣	衆魔競來前 (先 -n)

真先部，寒先部，真庚部の通押は晋宋の詩作にも用例を見ることができるが，本経が撰述された北魏になると激減の一途をたどる．まず真部と先部の通押は晋で62例あったものが，劉宋で2例，北魏には用例がなくなる．寒部と先部は晋で137例もあるが，劉宋北魏で合わせて18例あるうち，北魏は1例となっている．また真部と庚部の通押例は晋で8例あるが，劉宋の詩文でわずかに1例，そして北魏になると皆無となる．このように本経が撰述された北魏において，上記の韻部の通押例はそろって激減している¹⁴⁾．脚韻の配慮は万全とは言えないが，偶数句末にはすべて平声字を配し，その韻尾は [-n] (齒茎鼻子音) または [-ng] (軟口蓋鼻子音) によって統一がとれていることは事実である．

◎善導集記『往生礼讃偈』(47/445c)

第4偈

一一台上虚空中 (-juŋ 東韻)	莊嚴宝樂亦無窮 (-juŋ 東韻)
八種清風尋光出	隨時鼓樂応機音 (-jəm 侵韻)
機音正受稍為難	行住坐臥攝心觀 (-uan 桓韻)
唯除睡時常憶念	三昧無為即涅槃 (-uan 桓韻)

第10偈

弥陀身心遍法界	影現衆生心想中 (-juŋ 東韻)
是故勸汝常觀察	依心起想表真容 (-jwoŋ 鐘韻)
真容宝像臨華座	心開見彼国莊嚴 (-jem 嚴韻)
宝樹三尊華遍滿	風鈴樂響与文同 (-uŋ 東韻)

善導 (613-681) 自作の日中讃は詩歌としての押韻や平仄などの決まりごとが充満ではなく，作詩上の禁忌を犯しており，その作風は通俗的である．詩文における軟口蓋音 [-ng] と，両唇音 [-m] の通押は三国から隋にかけて3例であり，変文や講經文を除いた唐代以降の伝統の詩文では通押とならない．

第17偈

下輩下行下根人 (-jěn 真韻)	十惡五逆等貪瞋 (-jěn 真韻)
四重偷僧謗正法	未曾慙愧悔前愆 (-jen 仙韻)
終時苦相如雲集	地獄猛火罪人前 (-ien 先韻)
忽遇往生善知識	急勸專称彼仏名 (-jɛŋ 清韻)
化仏菩薩尋声到	一念傾心入宝蓮 (-ien 先韻)
三華障重開多劫	于時始發菩提因 (-jěn 真韻)

第8句「名」だけが軟口蓋音 [-ng] となっている。通俗的な敦煌変文などにはこのように [-n] と混用した例がある。善導の日中礼における鼻子音 (-n, -ng, -m) を通押とするならば、その規範は相当に緩かったことになる。ただし、通俗的であるだけに、大衆儀礼の教材としてはふさわしかったとも言える。

おわりに

翻訳という知的営為は容易なことではない。言語転換には語学力や技術だけが要求されるのではなく、それぞれの言語が使用されている両国の文化的素地を把握する必要があるからである。また宗教思想や文学、哲学にいたる古典の知識も不可欠な条件となる。偈の漢訳にしても、それがもとインド西域の韻文だけに、中華伝統の韻文として転換するには、訳者にも相応な力量が要求されたはずである。支謙など一部の漢訳者はこれを克服するだけの環境や条件をそなえていたが、それは詩歌にあるような厳格な押韻ではなく、許容範囲の相当に緩い通押であることは否めない。そうした緩さには、前述したような4点ほどの要因があり、これが偈の漢訳を容易ならざるものにしているのである。

- 1) 漢字音は音韻学的に [IMVE / T] で表示される。I = Initial (声母), M = Medial (韻頭=介音), V = Vowel (韻腹=主母音), E = Ending (韻尾), T = Tone (声調) である。このうち押韻とは韻母のすべてが異字で同じ律動ということになるので [MVE / T] の一致であり、通押とは韻母のうち韻腹と韻尾とが共通する [VE / T] の一致である。
- 2) 羅常培『唐五代西北方音』(国立中央研究院歴史言語研究所, 単刊甲種之一, 1933年), 羅常培・周祖謨『漢魏晉南北朝韻部演變研究』(科学出版社, 北京, 1958年), 周祖謨『魏晉南北朝韻部之演變』(東大図書公司, 台北, 1996年), Ding Bangxin, Chinese phonology of the Wei-Chin period: reconstruction of the finals as reflected in poetry (丁邦新『魏晉音韻研究』, 中央研究院歴史言語研究所, 1975年), 高田時雄『敦煌資料による中国語史の研究』(創文社, 1988年) はそれぞれ合韻譜を示している。
- 3) 前掲の周祖謨〔1996〕参照。以下の詩文中の通押数も同書にもとづく。
- 4) 拙文「鳩摩羅什の詩と『大智度論』の偈」(『印仏研』55-1, 2006年)。
- 5) Erik Zürcher, "Late Han Vernacular Elements in the Earliest Buddhist Translations," *Journal of the Chinese Language Teachers Association* vol.12, 1977), 松尾良樹「漢代訳経と白話: 訳経による白話史・初探」(『禅文化研究所紀要』15, 1988年), 朱慶之『仏典与中古漢語詞彙研究』(文津出版社, 1992年) など。
- 6) たとえば、『論語』, 支謙『維摩詰経』卷上, 安世高『安般守意経』は、ともに13,000字前後の典籍であるが、そこに用いられている漢字の字種をN-gram分析にかけて比較すると、『論語』1,275字種、『維摩詰経』946字種、『安般守意経』533字種

(46)

漢語仏典における偈の通押とその要因 (齊 藤)

である。現在主要な漢訳經典の字数と字種の割合を算出しているが、漢訳者の漢語能力とその漢訳仏典中に用いられている字種は概ね比例するものと予想される。

- 7) 詩文において、押韻させるために常用語彙をあえて倒置することは普遍的に行われている。小川環樹『中国詩人選集唐詩概説』(岩波書店, 1958年) p.138.
- 8) 漢字音は縦(時間)にも横(空間)にも相違が認められ、それはたとえば呉・楚(揚子江中下流域), 燕・趙(河北・山西), 秦・隴(陝西・甘肅), 梁・益(四川)では発音が異なり、また『韻集』『韻略』『音譜』などの先人が著した韻書における分韻もまちまちであったと指摘している。
- 9) 王力「南北朝詩人用韻考」(『清華學報』11巻3期, 1936年)では、時代が用韻に与える影響は大きい、地域が用韻に与える影響は小さいことを指摘し、更にまた同時代の同郷人であっても、韻部の緩慢さや厳格さは一様ではないという結論を下している。漢語を母語とする文人知識人にして、このようなありさまである。インド西域からの外来僧であれば推して知るべしである。
- 10) 『高僧伝』2 (50/332b), および『晋書』95を参照。
- 11) 木村宣彰「維摩詰經と毘摩羅詰經」(『仏教学セミナー』42号, 1985年), 中村元「クマラジーヴァ(羅什)の思想的特徴—『維摩經』漢訳のしかたを通じて—」(金倉博士古稀記念『印度学仏教学論集』, 1966年)。
- 12) 前掲拙文「鳩摩羅什の詩と『大智度論』の偈」。
- 13) 拙文「『後出阿弥陀仏偈』とその用途」(『浄土教典籍の研究』, 2006年)。「後出阿弥陀仏偈」の28ある韻字のうち、24字は[-n]または[-ng]の鼻子音で収束する陽声韻で、しかも『切韻』系韻書ですべて平声とされるものなので、明らかに撰者による意図的な措辞が伺える。
- 14) ただし遼欽立の『先秦漢魏晉南北朝詩』(中華書局, 1983年)で各時代の詩作数を比較すると、北魏詩は漢魏兩晉南北朝期においてその作品数は最も少ない。単純に用例の多寡をもってこの時代の通押を検証することはできないと思われるが、劉宋においてもその用例が減少している事実から、上記の寒部と先部の通押も積極的に支持することはできないだろう。

〈キーワード〉 偈, 韻律, 押韻, 通押

(佛教大学准教授)